



センタは大学を変える？

小林 史典¹

大学の機能は教育・研究・社会貢献・... とさまざまですが、そのため組織としては学部(学府, 研究科), 学科(専攻)が表に出るのが普通です。しかし, たとえば本学の組織図の最後に十把一からげに「センター等」と示されているものも, 運営組織と並んで, ときに大きな比重を持ってきます。

私は現在, そんな組織の1つ, マイクロ化総合技術センターの長をしていますが, 過去には情報センタ²との関わりが深く, まず個人レベルで, それが私の方向性にかなり影響を与えた, と思います。そしてさらに, センタという存在が大学そのものも変える可能性がある, という気がしてなりません。

私とセンタとの関係の始まりは30年近く前, 前任の長岡技術科学大学での, 人事係からの電話でした。「先生の, 4月からのセンタ兼任のことですが」に絶句したのは, それまで何も聞いていなかったからです(学科長が私に伝えるのを忘れた, というミスだったのですが)。私の情報センタとの関わりは, こんな青天の霹靂でスタートしました。

スタッフと手仕事 それまで運営委員だった私が「中」に入って, まあうまく動いている, と思っていたセンタの印象は一変しました。職員が消極的で, 定型業務が中心になっています。そこで, 彼らと話したところ, それでも, 決して現状に満足してはおらず, 結構いろいろな夢を持っていました。

それなら後は実行ですが, 私は手仕事が好きなので, コミュニケーションついでにと, 技術職員と一緒にやることにしました。下記の東大のサービスに当っては, 課金のためのデータ記録機能をPCで実装し, Turbo Pascal のコードを私が書きました。当時, UPS は手軽に買えなかったので, ユーザの login/logout の情報を時々刻々でプリンタに書き出すようにした, などを思い出します。

事務方との飲みコミュニケーション 教員にとって事務方は普通, 何かを頼む, というスタンスでの関係です。しかしセンタでは, 一緒に何かを立ち上げる, という新しい形態の付き合いが必要になります。

当時長岡のセンタには学務系の事務職員が1名おり, その人と前記技術職員を何度か自宅に呼んで, 飲みながら話しました。そこからまた新しいアイデアが出, センタ事業が充実していったのですが, やがて, 運営委員会で忘年会をやって, 委員からもアイデアをもらったら, という話になりました。

委員は教員ですが, 委員会としてやれば, センタにいたヒラの係員だけでなく, 係, 課と広がります。そこから, 教員と事務方の壁が少しは薄くなって, 私が長岡を離任する直前には図書館も加わり, 総合情報処理センタの夢が語られるようになってきました。

お金を儲け, 生かす さて, センタ職員の夢を実現するには資金が要りますが, 予算に余裕はありません。そこで考えたのが, 小さな装置をまず買って新しいサービスを始め, それを新しい課金体制にして従来より利益を上げ, 得た収入で次のステップとなる機器を入れる方法です。

この小さな装置がTDM(Time-Division Multiplexer)です。それまで長岡は東大 大型センタの「端局」の1つで, 東京との間に専用回線が引かれていました。ただ, その利用がバッチ処理に限定されており, TDMを入れたことで, 教員室や研究室のPCから, 直に東大が使えるようになりました。

¹大学院情報工学研究院 システム創成情報工学研究系 教授 fkoba@ces.kyutech.ac.jp

²これは, 本学の情報科学センターではなく, より広い「大学の情報サービスに関するセンタ」という意味です。

これには、バッチよりも高い時間課金を設定したのですが、直接東大が使える、と好評で、ある程度収入を上げました。このときの事業意識が、その後の私の人生を少し変えたかもしれません。

種まきは収穫の数年前 上記 TDM を入れ替えたころ、私は、東大センタの石田晴久先生が PR されていた Unix に興味を持ち、TDM に東大 VAX への接続を 2 チャネル用意しました。それで Unix のメリットが実感できた私は、講習会を積極的にやり、Unix ファンは徐々に増えていきました。

そして数年後、システム更新のとき、全学に LAN を張り、主な OS を Unix ライクなものにしました。このとき力になってくれたのが、講習会を聞いて Unix を使い始め、研究室に広めた学生たちです。彼らは、アンケートに積極的に回答し、大型機 OS からの転換の原動力になりました。

このときの教訓は、一朝一夕のものごとは成らない、です。数年後にはこうしよう、という意図を持ち、計画を立てて動くことで、一見不可能に見える目標も達成できるのだ、と実感したのでした。

先端的かつ安定に 1989 年、私は飯塚に移ってきました。出身が制御工学科のため、その昔「制御国立御三家」の 1 つだった九工大には、遠い九州ながら親しみを持っていましたが、長岡で機械にいた私が情報工学部に移る決心をしたのは、情報センタでの経験が大きく影響していると思います。

飯塚でまず学んだのが、学科やセンタに最先端のシステムを導入することです。導入そのものは、上記の長岡の経験がありますが、当時おそらく日本で最初の X 端末を、安定して動かして日々の教育・研究に供する、という仕事は初めてでした。非常にきつく、そしてだからこそ意義深かった、と感じています。

キーは、ある程度の先端性と安定した動作のバランスです。研究は基本的に先端を追い、教員は安定性が要求される仕事をあまり経験しません。しかし、それだけでは「事業としての大学」が完遂するはずはなく、この側面を、システム導入を通じて知ったことは貴重でした。

またまた手仕事 もう 1 つ、思い出に残るのが SCS (Space Collaboration System) です。これは、その後インターネット上の Polycom 等に置き換わって廃止されましたが、日本中の大学を衛星回線で結び、遠隔で会議や講義をできるようにしたシステムです。

当時の岡田センタ長から SCS 事業運営委員長に指名されたのですが、私の特徴は手仕事だろう、と、委員会の采配を振るうだけにするのは止めました。立上げ前は、そんなことしたのか、とあきれられそうですが、AV 講演室隣の準備室の床下に潜って配線をし、動き出してから、鹿児島大の非常勤講師を一部 SCS でやり、その経験を機材や使い方に反映させました。

実際にやられた方はご存じですが、遠隔講義というものは、少し慣れればどうということもないのですが、最初はそう簡単ではありません。それも、自分で使ってみれば百聞は一見に... ということです。

さて、ここに回顧録めいたことを書かせていただいたのは、実は私、この 3 月で退職するためです。情報センタに関して、30°くらいずつでしょうか、自分の方向性が変わり、振り返ると 180°近く方向転換して、学部長、副学長といった管理職を、昔を思えば本当に「想定外」で³、経験することになりました。そのとき、センタでの経験がどれだけ役に立ったか、計り知れません。そして、たまに方向を変えていると、人生も我ながら予想外の展開を生む⁴、と実感しています。

そして、その 30°の 1 回は確実に情報科学センター（これは一般名詞ではなく九工大の）によるもので、歴代のセンタ長と多くのスタッフの方々に、心からお礼を申し上げます。また、執行部の先生方がこれを目にされたら、1 つお願いがあります：センタで方向が変わるのは大学にも言えるので、センタスタッフをその側面で、ぜひ積極的に評価いただけないでしょうか。

³学部長になった、と学生時代の指導教員に報告したとき絶句されたのは、このことを如実に物語っています。

⁴今後のことを言えば、4 月以降、1 年前まで夢でしかなかった、東南アジアでの仕事に結びつくことになりました。